

福島県立福島工業高等学校 創立70周年を迎えて

塩 沢 守 行

(12回卒・電子工業科1回生)

プロローグ

西 暦 (年号)

1868 (戊辰) 1月3～4日鳥羽/伏見の戦い (戊辰戦争起こる)

9月8日 明治と改元

1872 (明5) 7月 (官営) 富岡製糸所設立 (群馬県)

1873 (明6) 6月 (民営) 二本松製糸会社設立 (二本松・霞ヶ城跡) (規模は富岡の約1/3)

1899 (明22) 7月日本銀行福島出張所 (明44:支店昇格) 福島市に開設、東北初、全国7番目

1909 (明32) 信夫郡清水村森合に「信夫郡立農学校」設立

1922 (大11) 「信夫郡立農学校」を「福島県立信夫農学校」と改称

1944 (昭19) 信夫郡渡利村にあった「福島県立蚕業農学校」と「福島県立信夫農学校」が合併し「福島県立福島農学校」となる。

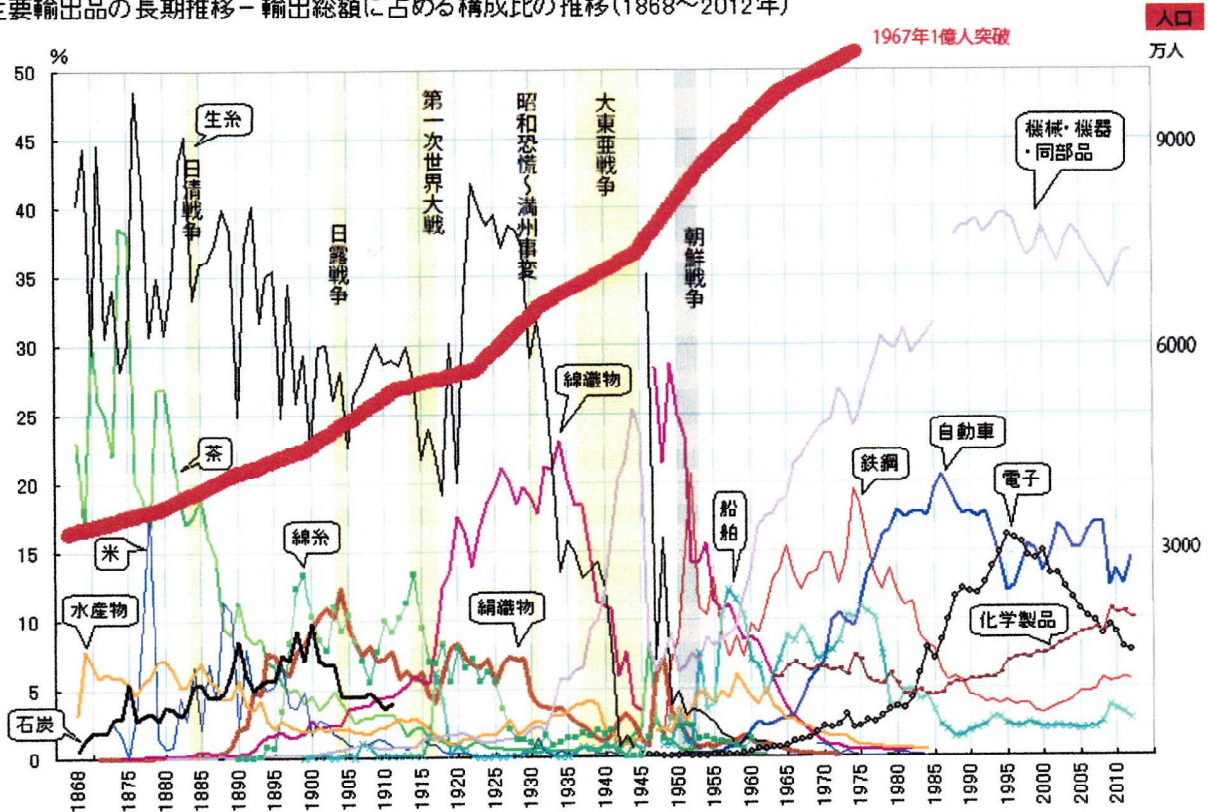
1945 (昭20) 8月 終戦

1947 (昭22) 3月清水村が福島市に合併。

1948 (昭23) 4月「福島県立福島農学校」が「福島県立福島農蚕高等学校」に改称発足

(現在:福島県立福島明成高等学校)

主要輸出品の長期推移-輸出総額に占める構成比の推移(1868~2012年)



上図を見ると明治維新後しばらくは、生糸、茶、米、水産物といった一次産品を主要な輸出品としていたが、明治の中頃になると茶、米は急激に減少していった。水産物は缶詰の輸出で一定の割合を保っていたが、維新後から日中・アジア・太平洋戦争直後まで圧倒的に生糸、絹織物、綿織物が多かった。その後は技術の向上で工業化が進み、船舶、鉄鋼、機械部品や電子機器、化学製品、そして自動車と輸出の主役が交代しながら、現在までの繁栄を支えてきた。

I. 県内工業高校と福島工業高校の歴史

【草創期】

- 1895 (明28) 大沼郡本郷町 (現,美里町) に「窯業徒弟学校」設立
- 1898 (明31) 会津若松市に「漆器徒弟学校」設立
- 1904 (明37) 4月「福島県立工業学校」創立 (会津工業高校の前身)
染色科、漆工科、窯業科を設置：徒弟学校は廃止
- 1908 (明41) 6月5日、「川俣町立染色補習学校」開校式：創立記念日
- 1917 (大6) 4月「福島県立工業学校」に応用化学科を増設
- 1922 (大11) 4月「川俣町外6か村学校組合立川俣染色補習学校」を
「福島県立川俣染色補習学校」と改称

【1926/12月 (昭元年) ~ 1945 (昭20) 終戦まで】

- 1929 (昭4) 4月「福島県立工業学校」を「福島県立会津工業学校」と校名改称
- 1938 (昭13) 10月「福島県立川俣染色補習学校」を「福島県立川俣工業学校」と改称
- ※1939 (昭14) / 7月 ~ 1945 (昭20) / 8月：日中戦争、アジア・太平洋戦争
- 1939 (昭14) 「会津工業学校」に機械科を新設、松江春次 (会津若松出身の実業家) の寄付
- 1940年 (昭15) 5月「福島県立平工業学校」開校：電気科、採鉱冶金科
- 1942 (昭17) 2月「平工業学校」に機械科、土木科を増設
山森栄三郎「福島電機工業学校」設立 (電気科)：福島市内初の工業学校
- 1944 (昭19) 「会津工業学校」、「川俣工業学校」共に染色科生徒募集停止
「川俣工業学校」に機械科を増設
「平工業学校」に電気通信科増設
福島県郡山商業学校が「福島県郡山工業学校」(郡山市立) に転換
機械科、工業化学科を設置
- 1945 (昭20) 4月「会津工業学校」に電気通信科増設

【戦後の復興期】

- 1946 (昭21) 4月「郡山工業学校」が「郡山商工学校」に、機械科、商業科を設置
- 1948 (昭23) 4月「福島県立会津工業学校」が「福島県立会津工業高等学校」に、
建築科を新設、電気通信科を電気科に変更、6科体制
「平工業学校」が「福島県立平工業高等学校」に、5科体制
「川俣工業学校」が「川俣高等女学校」と合併、「川俣高等学校」となる
普通科、染色科、機械科の3科
「郡山商工学校」が「郡山工業高等学校」(郡山市立) に、機械科設置
「福島電機工業学校」が「(財法) 福島電機工業高等学校」と改称
- 1950 (昭25) 4月「郡山工業高等学校」に建築科を新設、2科体制
- 1951 (昭26) 「福島電機工業高等学校」が「学校法人電気学園福島工業高等学校」と
改称、建設科、商業経済科を増設、略称「学法福島工業高等学校」
- 1953 (昭28) 4月「学校法人電気学園福島工業高等学校」に普通科を増設
- 1954 (昭29) 4月「郡山工業高等学校」が県に移管され「福島県立郡山工業高等学校」に
- 1957 (昭32) 4月「福島県立郡山工業高等学校」に電気科を増設、3科体制

【本校の創立過程】

- 1931 (昭6) 4月 福島第四尋常高等小学校 (現、第四小学校) に「福島市立工手学校」併設
 - 1935 (昭10) 4月「工手学校」を「工手青年学校」と改称
 - 1944 (昭19) 4月「工手青年学校」を廃止
 - 1945 (昭20) 8月 終戦
- | | |
|-------------------------|---|
| 戦争で壊滅的な打撃を受けた日本は、米国の圧倒的 | 工手学校は、現場の工員等を指導出来る人材を養成する目的で設置。1887 (明20) に、東京築地に設立されたのが起 |
|-------------------------|---|

な工業力に完敗したことを悟り、国を復興するには産業を軽工業から重工業に転換する必要に迫られていた。特に人材の養成は急務であった。

前述したように福島市内の公立の養成機関は福島市立の「工手青年学校」があったのみだったので、工手青年学校関係者、生徒、協三工業（株）の浅間久雄氏、西坂木工製作所の西坂長作氏等が中心となって、工業系学校建設の運動が高まると同時に教育の機会均等が謳われ、勤労青少年への高校教育を提供する為に昼間・夜間の定時制過程を主とする特色有る学校として、**1948（昭23）「福島県立信夫高等学校」**が設立された。農業、家庭、工業（機械、建築）各科と普通科からなる男女共学総合学校として、また飯坂分校、佐倉分校、季節分校の吉井田、茂庭さらに松川分室と信夫郡内各地に分散していたので校名も信夫郡に因んで付けられた。校舎が無かったので森合地区にあった「青年師範学校」や「第四小学校」を間借りしての発足となった。実習設備も「工手学校」当時の物を利用したり、工場からの寄贈の機械類等で実習を行うなど苦労があった。

1949（昭24）年「青年師範学校」が入江町（現音楽堂）へ移転したため、全校舎が使えるようになって天神町の工業科も森合へ移転、定時制（昼間3年）課程の工業科（機械・建築）1学級新設、

1950（昭25）定時制（昼間）課程の工業科1学級増で、機械科、建築科と科毎のクラス編成と同時に、全日制普通科1学級新設

1951（昭26）定時制（昼間）課程の工業科（機械・建築）を全日制に切り替え全日制普通科募集停止

1955（昭30）定時制（夜間）課程工業科1学級増設
機械科、建築科1学級ずつになる。

1957（昭32）校名を「福島県立福島工業高等学校」と改称し、工業化学科を増設し機械科、建築科の3学科になる。1学年3学級
定時制農業科・家庭科は「福島農蚕高等学校」（現福島明成高等学校）へ移管

1958（昭33）別科産業科（昼間・機械科短期1年課程）
定時制（夜間）工業化学科を新設

1960（昭35）年4月 電子工業科新設

※校舎改築始まる（木造平屋から鉄筋コンクリート3階建）

1961（昭36）年4月 電気科、別科産業科（夜間2年課程）新設

定時制（夜間）工業化学科募集停止

1962（昭37）精密機械科新設、

1963（昭38）機械科、電気科各1学級増設

1964（昭39）東京オリンピック、体育館竣工

1965（昭40）機械科1学級増、別科産業科（機械1年課程）は昼間より夜間（2年課程）へ

1966（昭41）電子工業科を電子科に改称

1967（昭42）機械科1学級減、別科産業科（機械、電気）募集停止、

源。設置学科は、土木、機械、造船、造家（建築）、採鉱、冶金、製造化学で、入学の受験資格は高等小学校卒となっている。これが現在の「工学院大学」の母体である。実務に強い大学として知られている。

協三工業は1940（昭15）に、福島駅西口（三河南町）に設立、当時は主に小型の蒸気機関車を製造。そのために福島駅構内につながる引込線を有していた。現在日本国内で蒸気機関車を新制可能な唯一のメーカー。東京ディズニープランドの機関車を製造。1993（平5）佐倉西工業団地へ移転

西坂木工は1938（昭13）に鋳物製作に必要な砂型を造る為の木型製作を始め天神町に工場を建設後1951（昭36）に野田町に移転、有限会社になる。2013（平13）町庭坂へ移転

校名変更騒動

前述したように市内には「学法福島工業高等学校」が存在し、同一市内に校名が同じ学校が二つ出来る事に事に対し、学法の卒業生、学校関係者の反対運動が起こり、新聞紙上を賑わした。両校を区別するのに学法に対し県工という呼称が生まれ、次第に定着していった。

1979（昭54）学法が「学法福島高等学校」と改称したが、因縁を感じざるを得ない。

定時制（夜間）電気科 1 学級新設

1974（昭49）初めて女子生徒入学（建築、工業化学）。

1976（昭51）精密機械科、定時制電気科募集停止。機械科 1 学級増設

※機械科 3，建築科 1，工業化学科 1，電子科 1，電気科 2 の 1 学年 8 学級になる。

1988（昭63）電子科を情報電子科に改称。

1993（平5）定時制建築科、機械科募集停止。定時制工業科 1 学級新設

2003（平15）4月 工業化学科を環境化学科に改称、電気科 1 学級減。

II. ユニークな先輩達

1. 藤安 正博 氏：刀匠、藤原 将平(まさひら)、精密機械科 1 回卒、立子山に鍛刀場を開設)

川俣町生、1966（昭41）3月、卒業と同時に長野県坂城町の刀匠、故人間国宝、「宮入行平(ゆきひら)」師に入門。宮入 行平氏の高弟であり、現代刀匠による古刀再現の糸口を見出した名工として、知られている。

1972（昭47）第8回新作名刀展に初出品、努力賞を受賞。

1975（昭50）独立し、福島市立子山に鍛刀場を開設。

以後作刀の研究修練を重ね、日本美術刀剣保存協会優秀賞 3 回、奨励賞 6 回、努力賞 7 回を受賞。

1984（昭59）年、伊勢神宮第 6 1 回式年遷宮、御神宝太刀勤作奉仕の大役を担う。

1990（平成2）年には日本美術刀剣保存協会会長賞受賞

師である行平氏没後、師の実子である宮入小左衛門行平（宮入 恵）を預かり、弟子として鍛刀修行を積ませた経緯からも、師の信頼が厚く、その技量の高さを物語っている。

2. 尾形 好雄 氏：(工業化学科 8 回卒(昭41年度)(現) 日本山岳協会常務理事・国際部長、日本ヒマラヤ協会常務理事

福島市生、在学中は山岳部に所属し登山の基礎知識を学ぶ。鍛えられた屈強な体から山仲間からは「サイボーグ オガタ」と言われた。1974（昭49）にヒマラヤ山岳隊の隊長として初登頂以後、17回の海外遠征を一度も重傷を負わずにやり遂げ「事故と弁当は自分持ち」「遭難の99%は自分の責任」と戒める登山界の大御所。17回のヒマラヤ遠征により 8000m 峰 4 座、7000m 峰 6 座(未踏峰 5 座)、6000m 峰 4 座など 15 山に登頂成功する。特に 1993（平5）年 10 月 22 日、世界最高峰エベレスト 8,846m 南西壁に冬期世界で初登頂に成功、全国に名を知らしめた。当時日本山岳会の快挙と言われた。17 回のヒマラヤ登山で登頂を逃したのはブータン最高峰ガンケル・プンズム(7,541m)だけという実績を誇る。それも高山病に倒れた仲間を救出するため初登頂を捨てての決断だった。一度も事故を起こさず、仲間とともに生還した伝説の登山家である。1997 年にはガッシャーブルム、ブロード・ピークの 8000m 峰連続登頂に成功。

1994（平6）朝日スポーツ大賞、スポニチ芸術文化賞などを受賞

著書：『ヒマラヤ初登頂 未踏への挑戦』（2009/7,東京新聞出版局）

3. 梅津 正道氏：電気科 19 回卒（昭56年度）

福島市生、卒業後 日本電気(株)横浜事業所へ入社、宇宙開発事業部 製造部検査課配属

1990(平2)～1992(平4) 第32次日本南極地域観測隊に参加、

オーロラ観測データを人工衛星から受信する機器運用の業務に携わる。

2006(平18)～2008(平20) 第48次日本南極地域観測隊に参加

2008(平20) 11月14日創立60周年記念講演、講師

2009(平21)～2011(平23) 第50次日本南極地域観測隊に参加

2015(平27)～2017(平29) 第57次日本南極地域観測隊に参加

第48次の参加から「電離層定常観測」に加わり、オーロラの観測にも携わっている。

Ⅲ. 生徒諸君に望むこと（ノーベル賞あれこれ）

今年のノーベル賞医学・生理学賞をアメリカ人と共同受賞者に選ばれたのは、本庶 佑さんです。受賞理由は、癌の治療に今までの方法と（手術で切り取る、放射線を照射する、抗がん剤の投与）とは全く違う「免疫療法」を確立し、実際に薬の製造まで成し遂げた功績によるものです。これにより、今までは手遅れと言われるような患者さんにも治療が可能になったということです。

皆さんもご存じの本県出身「野口英世」博士も、一時ノーベル賞候補に挙げられたそうです。本庶さんは小学生の頃、野口博士の伝記を読んで医者への道を志したそうです。最も父上が医者だったせいもあるのでしょうか。

日本人のノーベル賞受賞は、1949年湯川秀樹博士が物理学賞を受賞以来26人です。受賞者の出身県を見ると多いのは 愛知4人、東京3人、大阪3人、京都3人と4都府県で13人半分を占めています。残念ながら、東北出身者はいません。環境が大きく左右しているのでしょうかね。

26人の受賞者のなかで、世界的にも、勿論日本でも珍しい経歴の持ち主がお一人居られます。2002年化学賞を受賞した、田中 耕一さんです。この年は物理学賞を小柴昌俊さん（愛知県）も受賞したので、ダブル受賞ということで日本中が大いに湧きました。

田中さんは富山県の出身で、（そういえば今年ノーベル賞に決まった本庶 佑さんのご両親も富山県出身だそうです。）東北大学の工学部電気工学科出身です。大学院には進学しなかったのが修士とか博士という肩書きはありません。島津製作所という測定器メーカーの（環境科学科にも島津の測定器はあるでしょう）社員で、生涯いち（一）エンジニアを貫き、毎日作業衣を着て現場で実験、研究を続けています。今までのノーベル賞受賞者のなかでは、私達に一番身近な存在の人だと思います。

受賞理由は、タンパク質の分子量もはかれる高性能の質量分析計の開発です。人間の体を作っているタンパク質は10万種類ありますが、それぞれの構造、性質を知ることによって病気の予防、治療に役立てられます。人間の体の遺伝子 DNA がほぼ解明された今日、これからは同じ病気でも患者個人個人にあった治療法が可能になります。その重要なポイントがタンパク質の解明だそうです。今年ノーベル賞に輝いた免疫療法も、個人の持つタンパク質の特性と DNA とを組み合わせることによって、一人一人に合った治療が可能になるそうです。

田中さんがこの分析計の特許を取得したのは、僅か入社2年目の25歳のときでした。それから16年後の41歳のときにノーベル賞を受賞したのです。

福島県立福島工業高等学校校歌

長瀬 俊夫

仰ぐ 天の
 行手に 海を
 若き 抱負の
 燃え 立つところ
 志輝あり われらが果工

緑の やけく 青春の
 その 名を 信じて 風清く
 若き 胸に 血を ためて
 果工の 技術を 求めゆく
 志輝あり われらが果工

兄よや阿武隈
 われ等の 学ば
 志を 立てて
 常に 真理を
 志輝あり われらが果工

情を 山河の
 鍛えし 意志と
 若き 誇りの
 志輝あり われらが果工



校歌

作詞 野村俊夫
 作曲 古関裕而
 (いずれも直筆原稿による)

古関裕而曲 285年10月28日



新 校 舎 (正門)



旧 校 舎 (正門)

福島県立福島工業高等学校配置図

S 1 / 1200

